

肺がん検診（地域）

動 向

平成25年度地域住民対象の巡回肺がん検診は実施市町村12団体、受診者数8,018名であった。

当協会では、一次検診実施後に各医師会で開催されている精密検査フィルム読影会（カンファレンス）に専門医師・放射線技師・担当職員等が参加し、フィルムの比較、再検証等を行うことで一次検診の精度向上に努めている。

綾瀬市においては、オープンダブルチェック（当協会と医師会とのダブル読影体制）を実施しており、一次検診フィルムの比較読影のチェックのみならず精密検査機関へのデータ提供の利便を図っている。

厚木市では、平成13年度より受診者の拡大を目的として、集団検診による肺がん検診から施設医療機関で実施している基本健康審査との併用検診（施設による個別検診）に移行している。医療機関にて直接撮影を実施し当該施設の医師による一次読影、当協会の専門医師による二次読影の体制により、読影結果を医療機関へフィードバックしている。平成25年度読影数は19,807件であった。なお、集団検診同様にフィルムの精度管理や精検結果把握のためカンファレンスを実施している。

また、大和市においては、平成20年度より厚木市同様の肺がんフィルム二次読影を実施しており、平成25年度の読影数3,082件となっている。

方法と結果

胸部単純X線撮影が基本である。背腹正面及び右左の側面撮影である。現在は撮影技術上、直接、間接の区別は特別な場合以外にはなされない。地域における肺がん検診の主体は自治体であるために所によっては従来の間接を希望することもあるが当協会の事業としては間接撮影はなくなった。しかしフィルムとして貸出する必要がある時には間接サイズにダウンロードして使用している。またX線撮影と併用して問診票によってハイリスク群を選別して喀痰細胞診を施行している。表1に年度別の受診者数とX線検査、喀痰細胞診別に記載してある。地域における肺がん検診の受診者は職域に比して年度毎に僅かではあるが増加している。検診総数は8,018名で

性比は4：6と地域の特徴を表している。X線検査による要精検査は3.0%であり精検受診率も約70%と極めて妥当な数値といえる。

地域での喀痰細胞診は喫煙の影響もあって断然男性が多い。要精検での二種所見は血痰または家族歴のものである。

読影については厚木市、大和市以外の市町村では綾瀬市、海老名市両医師会とは二重読影ないしは三重読影となっている。表2は読影判定区分別である。Aが0であるのは当然である。DがEよりも定値であるのはEの意味する安全圏内の考え方が入っているのかとも考えられる。D+Eで3.0%は悪性腫瘍を指摘するには妥当な数値と考えられる。

表4では各市町村の受診状況を示している。総数8,018名から肺がん3例、結核の治癒所見が13例と少なくみえるが問診票で受診者が過去に結核の病歴を登録しない限り“結核”とは記さないのを原則としている。肺がん例は二宮町の受診者数48名のうちから1例であり精検受診率も100%であった。愛川町からは2名が出ているが検診の地域としては最大の人口（受診数2,409）を示していて2名は女性である。表5に年齢分布を示す。因みに昨年度は全肺がん例が7例で最大人口の愛川町から4名が発見されている。表5の如く本年度も年齢は共に60歳台から70歳台である。夫々の病期、病型については不詳である。表6は厚木市、大和市（従来からの肺がん検診も行われていて検診の制度としては二重になっている）の夫々平成13年度、平成20年度から二次読影として受託している件数であり厚木市はほぼ20,000件弱で一定化し、大和市は一旦、低値であったものの現在は増加の傾向にある。

表7は被検者の年齢分布であるが厚木市は典型的な高齢者検診となっていて制度上、二重構造になっている大和市にあっても同様の年齢分布になっている。厚木市からは4例の肺がん例があり、読影判定別ではE2例、D1例、B1例で全員70歳台である。病気、病型は不詳である。大和市については現在調査中である。判定のD、E分布は2.6%～3.8%である。

関係の集計表は86頁に掲載